

Ceci dit, cela dit と語用論化

渡邊 淳也

(筑波大学)

この発表は、ceci dit と cela dit を比較しながら、それらの機能について論ずることを目的とする。

これらにはいずれも、(i) 字義に近い意味をたもち、後件で言語外的な行為がのべられる用法、(ii) 前件も後件も言語内的であり、後件が前件に対する留保としてはたらく連結辞的用法、(iii) 明示的な後件を欠く用法の3つがみとめられる。(i) から (ii) へ、(i) から (iii) への意味変化が、それぞれ通時的にも確認できる。(i) から (ii) への意味変化は、語用論化 (pragmaticalisation) のひとつの事例であるといえる。

本研究で実施したコーパス調査によると、ceci dit の使用頻度は cela dit よりはるかに低い (13.1%対 86.9%) もの、連結辞用法が占める割合は ceci dit の方が cela dit の場合よりはるかに多かった (63.2%対 22.8%)。前者の違いには、ceci dit に対する規範的な禁止が作用している (ceci dit を禁止する立場からは、ceci は voici と同じく、言語内指示では後方しか指してはいけないということになる)。後者の違いは、cela のほうが照応形態素 I- をふくんでいることから、言語内指示にいつそう適しているように思えるかもしれない (その意味で予想に反する) が、ceci に特徴的な直示記号素 c- によって発話状況を直示していると考えられる。

上記で (i) とした、後件で言語外的な行為がのべられる用法は、ceci dit、cela dit の字義に近く、通時的にももっとも古くからある用法である。(ii) の連結辞用法は、そこから、後件にも発話行為を介することによって派生した用法であり、このことが「語用論化」の内実であると考えたい。

(ii) の用法は、コーパス調査では 19 世紀前半から確認される、比較的新しい用法である。この用法では、後件は前件から生じうる潜在的な帰結のひとつに対立することにより、前件に対して留保をつけているのであって、前件と後件は直接対立しない。この留保的意味は、ceci dit、cela dit の文字どおりの意味から演繹可能である。

(iii) 後件を欠く用法は、19 世紀後半から確認される、新しい用法である。言語外用法から連結辞用法にいたる意味変化とは異なる用法拡張をこうむった事例であり、前件の発話行為の様態を示す。

【付記】 この研究は、現在進行中の日本フランス語学会研究促進プログラム「パロールの言語学」の一環をなしている。